

河村

瑞賢

—東廻り航路を拓く—

「これで、きっと江戸へ米を送ることがができる。」

河村瑞賢は、荒泷（現在の巨理町荒泷）の港に立ち、船を見送りながらつぶやきました。

瑞賢は、元和四（一六一八）年、東宮村（現在の三重県南伊勢町）に生まれました。

十三歳のとき、江戸に出た瑞賢は、工事に使う石や木材を運ぶ車ひきの仕事につきました。仕事のかたわら、沼地を埋め立てたり堀を作ったり石垣を組んだりして町や屋敷ができていく工事の様子を、いつも興味深く見ていました。

二十歳を過ぎたころ、工事をしていた役人から、人足が集まらず工事が遅れがちで困っているの、人足頭をやってみないかと頼まれました。瑞賢は、それまでさまざまな仕事のやり方を見ていて、人足をやる気させる方法や仕事の段取りが大切であることに気づいていました。そこで、それを実際に生かしてみることになりました。すると、予定より短期間で工事を終わることができたのです。その後も、仕事を頼まれると確実にやりとげるので、周囲から認められるようになりました。

瑞賢は、これから何が必要になるかをいつも考えていました。明暦三（一六五七）年の江戸の大火のときには、すぐに材木が足りなくなる

人足：  
力仕事などをする人。  
頭は、その中で責任ある人。



と考え、いち早く木曾（現在の長野県木曾地方）まで買いに行きました。そして、材木商として成功したのです。材木商となってからも、難しい土木工事があると仕事を頼まれました。努力や工夫を重ねて見事に成功させる瑞賢の腕が評判になっていたのです。

やがて、瑞賢は、幕府から大きな仕事を任されることになりました。それは、数万石の奥州の御城米を江戸に運ぶことでした。

「今の海運では、船が難破することが多い。しかも、江戸まで御城米を運ぶのに一年もかかることもある。これでは米が使い物にならない。何とか速く安全に米を運ぶ方法を考えてくれないか。」

と頼まれました。

瑞賢は、原因をつき止めれば、安全に運ぶことが可能になると考えました。そこで、これまでの海運の方法をくわしく調べることにしました。すぐに使用人に、荒浜から房総半島を回って江戸に向かう沿岸の港や道を調べて絵図面にするのを命じました。また、船乗りの話をできるだけくわしく聞くように念を押しました。

調べてみると、これまでは幕府の役人は船問屋を決めたら、その後の仕事は船問屋に任せきりだということが分かりました。

瑞賢は、それまでのやり方を変えるために、幕府が直接船を雇って海運を行うことに改めることにしました。そして、船の操作は風力に頼るものであるため、風や海の流れをよく知る熟練した船頭を選んで乗せることにしました。また、転覆や浸水を防ぐために船の側面に目印をつけ、それをこえて船が沈むほど荷物を積みすぎないようにしました。

奥州：

今の東北地方の福島、宮城、岩手、青森の四県と秋田の一部。

石：

主に穀物を量るのに用いる体積の単位。

一石は（約一五〇キログラム）約一八〇リットル。

御城米：

全国の幕府の領地から江戸などに運ばれる年貢米。

難破：

暴風雨などにあつて船がこわれたり浸水して航行できなくなったり沈没したりすること。

船問屋：

各地の港にあって、港に着いた船の荷物の積みおろしをしたり船員の世話したりする店。



東廻り航路

難しいのは、航路をどうするかでした。瑞賢は船頭たちの話を聞いたたびに考えました。そして、房総半島に近づいたとき、砂浜の海岸や海中に岩場がたくさんある所で難破することが多いということがわかりました。

ある船頭から、

「房総半島で大風にあい、岩場に流されそうになって必死に帆を使ったのです。すると大島（現在の東京都大島町）が見えてき

て、やっこの思いでたどり着いて、助かりました。その後、南西の風に乗ったら、苦もなく江戸に着いてしまいました。」

という話を聞きました。瑞賢はこれだと直感しました。

こうして、房総半島から江戸湾に直接入らず、伊豆大島や神奈川県の三崎、静岡県の下田に行ってから、南西風を待つて引き返し、江戸湾に入るように航路を決めたのでした。また、瑞賢は、安全で確実な航行を行うために途中の寄港地を定めて浦役人を置き、水先案内人を配置して、船や荷物を管理しました。また、天候や風向き、潮の流れの情報を陸と船の間で伝え合うことにしました。

航路が決まると瑞賢は、江戸廻米の起点となる阿武隈川河口の亘理町の荒浜港へ向

浦役人：

御城米を江戸におくるために米の保管をしたり、港の管理をする役人。

廻米：

江戸時代、多量の米を一地点（おもに生産地）から他の地点（大坂、江戸などの大市場）に輸送すること。



武者惣右衛門屋敷近くの瑞賢堀（昭和初期）（千葉宗久氏蔵）

かいました。廻米に以前からかわっていた浦役人の武者惣右衛門の屋敷を宿にして、阿武隈川の上流の信夫郡や伊達郡（現在の福島市周辺）までの川の流れを調べました。阿武隈川の急流をゆるやかにするために岩を取りのぞいたり船が通る水道をほったりしました。そうして、御城米を安全に運ぶことができるようにするとともに、阿武隈川の河口の整備も行いました。さらに、荒浜には御城米を保管しておく米蔵を建て、米蔵から船で米倉庫まで運ぶ堀（瑞賢堀）を作りました。

準備は整い、寛文十一（一六七二）年に荒浜から廻米船が出航しました。荒浜港を起点としたその船は、信夫郡や伊達郡などの奥州の米を阿武隈川と東廻り航路を使って大量に江戸に送ることに初めて成功しました。

その後、東廻り航路は仙台藩の米を大量に江戸に運び、大きな利益を生み出しました。また、石巻や塩竈などの港もこの航路の拠点として発展し、太平洋側の沿岸地域の物資の輸送と人や文化の交流に大きな影響をあたえることになりました。

#### 河村瑞賢

河村瑞賢は、元和四（一六一八）年に東宮村（現在の三重県南伊勢町）の農家に生まれました。その後、江戸（現在の東京）で材木屋を営んだ。瑞賢は、江戸幕府の依頼を受けて阿武隈川の水運を切り開き、物資を江戸まで輸送する東廻り航路を切り拓いた。この航路は、物資の輸送に要する時間と費用を大幅に減らした。